

滋賀県立大学人間看護学部 地域交流看護実践研究センター

活動報告書

2022 年度

ごあいさつ

2022年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防対策も生活化されつつ中で、感染症拡大防止と社会生活の活性化の両立が求められる年でもありました。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大による社会生活で拡充された通信環境は、本センターからは遠方で移動に時間を要したり、時間内での来校が困難であったりする地域の看護職の皆様と本センターとをつなぐ手段を増すことができました。

感染症予防対策を行いながら対面での活動は、参加人数にばらつきはありましたが、参加者からは同専門職らと研修内容以外の情報交換や交流ができることの喜びの報告を得ることができました。もちろん、状況によってはオンラインでの参加活動に切り替えられたり、対面とオンライン参加の両者を組み合わせたりする活動も行ってきました。

感染症拡大防止と社会生活の活性化の両立を進め従来の活動を取り戻していく中、新たな試みとして、本センターと同様の看護研究センターを有する他大学との交流会を対面とオンラインとの併用で開催しました。センターの活動に対する情報交換だけではなく看護教育や地域連携の在り方について知見を深めることができました。今後も他大学との交流を重ね本センターの活動を活性化していきたいと思えます。

本センターは地域住民の健康の維持・増進のため、地域に開かれた教育研究機関として機能することも目指しています。さまざまな社会状況の中でも地域の皆様方の健康に貢献できるよう地域の看護職の皆様と共に考え、連携した活動を今後も進めまいりたいと思えます。皆様の一層のご支援とご高配をお願いいたします。

滋賀県立大学人間看護学部
地域交流看護実践研究センター長
横井 和美

目次

ごあいさつ

I. 2022 年度(令和 4 年度)の活動	…	P1
II. 各部門の活動報告		
一 研究部門	…	P2
一 研修部門	…	P4
一 情報部門	…	P8

I. 2022年度(令和4年度)の活動

	研究部門	研修部門	情報部門	
4月	・研究相談、文献検索		・ホームページ更新	・運営協議会委員委嘱
5月	・共同研究新規募集 ・共同研究審査会(継続) ・看護協会共同事業受入 ・研究相談、文献検索		・ホームページ更新 ・事業案内を関係機関に発送	
6月	・研究相談、文献検索 ・看護研究学習会開催	・専門講座開催	・ホームページ更新	・運営協議会開催
7月	・研究相談、文献検索 ・看護研究学習会開催	・専門講座開催	・ホームページ更新	
8月	・看護研究学習会開催 ・研究相談		・ホームページ更新	・看護協会査読受入
9月	・研究相談、文献検索	・公開講義開催	・ホームページ更新	
10月	・研究相談 ・共同研究募集(第2次)	・講演会開催 ・専門講座開催	・ホームページ更新 ・事業案内を関係機関に発送	・看護協会査読受入
11月	・研究相談	・公開講義開催 ・専門講座開催	・ホームページ更新	
12月	・共同研究審査会(第2次)	・公開講義開催 ・専門講座開催	・ホームページ更新	
1月	・共同研究審査会(第2次) ・研究相談	・専門講座開催	・ホームページ更新 ・文献検索室ネットワーク整備	
2月	・研究相談、文献検索 ・看護協会共同事業完了報告		・2023年度版リーフレット作成 ・2022年度活動報告書作成 ・文献検索室ネットワーク整備	
3月	・研究相談、文献検索	・公開講義開催	・ホームページ更新	・岐阜県立看護大学との交流会

II. 各部門の活動報告

1. 研究部門

2. 越山雅文教授、米田照美准教授、松井宏樹講師

3. 活動の概要

1) 共同研究（6件：継続3件、新規3件）

昨年度から継続の共同研究3件の研究費助成について、共同研究審査会での審査を経て承認した。また、新規の共同研究3件の採択について、共同研究審査会の審査を経て承認を行った。

2) 研究相談（24回（12件）：対面3回、オンライン15回、メール5回、学外1回）、 文献検索（9件（11人））

研究相談の総数は24回であった。そのうち、対面での研究相談が3回、オンライン15回、メール5回、学外1回であった。文献検索の利用件数は9件であった。

3) 看護研究学習会（6/29、7/20、7/27、8/4）参加者：8名

滋賀県看護協会より委託を受け、看護研究学習会（2022年度看護研究サポートリーダー育成研修）を開催した。新型コロナウイルス感染症の蔓延状況を鑑み、2022年度の看護研究学習会は、対面とオンラインで開催した。コロナ関連で対面での参加が難しい研修参加者には、Web会議ツールで学習できる受講環境を整えて受講していただいた。

研修では、看護研究方法の理解を深め、臨床看護研究のサポートリーダーとしての能力を養うことを目指し、文献検索の方法や論文のクリティーク、研究デザインの立案、看護研究サポートリーダーの役割等についての講義・グループワークを実施した。

研修受講後のアンケート結果では、個人ワークやグループワーク等を通して、参加者全員が看護研究サポートにおける自己の役割を見出すことができたという回答していた。さらに、クリティークの難しさや具体的な研究方法について学習したいという意見もみられた。

4. 次年度にむけて

テーマ提案型の共同研究を募集した結果、3件の申込みがあった。今後も必要時、社会情勢をふまえたテーマで共同研究を募集し、大学と地域の連携を進め、地域の課題解決を支援していく必要があると考える。

また、研究相談の総数は24回で、オンライン・メールでの研究相談が大半を占めた。コ

コロナ禍により、対面以外の方法による研究相談の需要が高まったものと推察される。引き続き、研究相談利用者の希望に沿えるよう環境を整えていく。

看護研究学習会を対面とオンラインで実施した。コロナ関連で対面での参加が難しい研修参加者には、Web 会議ツールで学習できる受講環境を整えて受講していただいた。大きなトラブル無く、研修を運営することができた。演習形式では、グループワークを行ったことで、活発に意見交換が行われ、看護研究に対する理解が深まったと考えられる。

研修の最終日は、論文発表や論文投稿に備えた査読についての講義を行った。査読ポイントを知ることによって抄録作成、論文投稿時の参考になるものとする。

次年度からは、臨床看護研究サポートリーダー研修会修了者へのフォローアップを兼ねた学び直しの研修内容を検討する予定である。

1. 研修部門

2. 委員：古川洋子准教授、小野あゆみ講師

3. 活動の概要

1) 講演会 看護の中の LGBTQ -相手も自分も大切にするコミュニケーション-
(2022/10/22 26名)

【内容】

「看護の中の LGBTQ—相手も自分も大切にするコミュニケーション—」と題し、一般社団法人 JCMA 代表理事、コミュニケーション理事の吉井奈々先生を講師に、講演会を開催した。今年度も、COVID-19 感染状況をみながら、環境を整え、対面で開催を行うことができた。看護の対象は人間です。人間の多様性をどのように受け入れようと準備し、受け入れを行っているのか、一度原点に舞い戻り考える機会を得ることができた。本テーマに関心のある専門職が集まった。ライブ講演中の吉井先生の表情や言動は、聴衆の心に寄り添い、何かしら元気になれる時間であった。「相手も自分も大切にする」という独自のメッセージで、心の悩みや不安、恋愛や結婚に至るまで、子育てや働き方、パートナーシップなど、人間関係の問題を解決するための多くのヒントをいただいた。講演終了後も、時間を惜しむことなく、参加者との意見交換を楽しんでいらっしゃる先生の前向きな姿が印象的な講演会であった。

2) 専門講座

包括的支援と助産師ケア -多職種連携と助産師活動-

(2022/6/28 14名、7/11 5名、7/27 18名、10/4 10名)

「包括支援と助産師ケア—多職種連携と助産師活動—」と題し、4回シリーズで専門講座を行った。1回目は、元高校教師の清水美春先生を講師に「高校生への性に関する健康教育活動」、2回目は、行政保健師の落川昌子先生より「子育て包括支援事業の展開とその実態」、3回目は、児童生徒支援室教諭・思春期保健相談員の脇野恵子先生より「小・中学生の包括的性教育を考える」、4回目は、乳児院勤務助産師の谷川瑞穂先生より「乳児院で助産師が行う母子やその家族支援活動」と、公開講義として専門職を対象に専門講座を開催した。大学院生のみならず、地域や臨床で活躍する助産師や教職員、これから教員を目指そうとする学生など、多くが集い、いろんな視点から意見交換ができた講座であった。通算47名という多くの方に参加いただき実り多き時間を過ごすことができた。

ELNEC-Japan クリティカルケア看護師教育プログラム

(2022/10/25、11/15、12/13、2023/1/17 各日4名) 本田可奈子

ELNEC(End-of-Life Nursing Education Consortium) -Japan クリティカルケア看護師教育プログラムを滋賀県ではじめて開催した。このプログラムは、米国で開発された

「ELNEC Critical Care」の日本版で End-of-Life ケアに携わる看護師に必須とされる知識修得のための教育プログラムある。8つのモジュール (M) からなり、M1:クリティカル領域におけるエンド・オブ・ライフ・ケア、M2:痛みのマネジメント、M3:症状マネジメント、M4:倫理実践、M5:文化とスピリチュアリティ、M6:コミュニケーション、M7:悲嘆、M8:看取りで、講義と演習で構成される。ファシリテーターと講師には ELNEC-JCC の指導者養成プログラムを受講した学内教員 2 名と学外講師 3 名が担当し、月 1 回合計 4 回、対面でおこなった。参加者は 4 施設計 4 名で、クリティカルケア認定看護師が 1 名、他はクリティカル領域以外で、全員が経験年数 10 年～20 年以上で自施設の指導的立場の看護師の方だった。参加者の一人が都合上 1 日だけ Zoom online 上の参加となったが、全員に修了証を授与することができた。少人数であったので全体でディスカッションができ、質疑応答の時間が長くとれ、自施設の困りごとの共有ができ、事後アンケートではほとんど 5 で満足度は高かった。

新カリキュラムにおける成人・老年看護領域実習の取り組み
(2022/12/19 54名)

2022 年度の看護基礎教育のカリキュラム改訂に伴い、我が国の疾病構造や政策を背景に、看護基礎教育の変遷から新カリキュラムの特徴、本学における成人看護学及び老年看護学の学習の位置付けと臨地実習の特色について概観した。これらをふまえて、専門講座に参加した全ての実習施設関係者と建設的なディスカッションを図り、臨地実習での学習効果を更に高めるための指導内容や体制について共有することができた。

3) 卒後教育-公開講義

「看護キャリアデザイン論」高度実践看護への道ー各スペシャリストの実践についてー
(2022/7/7 15名)

看護キャリアデザイン論は学部の 3 回生・4 回生を対象に、看護師資格を有した後、自己の夢やライフスタイルに合わせて看護のキャリアをどのように築いていくのかを考える選択科目である。毎年、様々な看護キャリアを有した方からの講演を組み入れている。今回は慢性疾患看護専門看護師で教員をされている方とクリティカルケア認定看護師・診療看護師として臨床で活躍されている方からキャリアアップとなった動機や現在の活動について講演いただいた。大学院生や医療機関の看護師、訪問看護師など多くの方の参加を得ることができた。

「看護理論」「看護研究方法論」看護にいかす現象学
(2022/9/20 30名) 本田可奈子 古株ひろみ

看護実践は生活世界の多様な相互作用を含む実践といわれて、看護実践の理解や研究手法に現象学が活用されている。そのことから看護実践の理解（看護理論）、研究方法（看護研究方法論）への2つの視点から「看護に生かす現象学」として現象学を専門とする大阪医科薬科大学教授 小林道太郎先生により2コマご講義いただいた。前半の1コマは「現象学の理解」、後半1コマは「現象学的質的研究」を講義いただいた。参加者は学外者3名、M1：11名、M2：2名、教員：14名であり、看護実践と現象学についてディスカッションももたれ、参加者からは自己の体験を現象学的にとらえようとする試みがみられた。外部者の参加が少なかったことから今後は大学院の講義を外部に知ってもらうためにもアナウンスを工夫して外部者の参加が増えるように努めたい。

「フィジカルアセスメント」 フィジカルアセスメントで使用する統計の基礎知識
(2022/11/10 10名)

研究科のフィジカルアセスメントは高度実践看護学部門の選択必須科目で高度実践看護に必要な臨床判断を行う能力を養うことを目的としている。今回、フィジカルアセスメントで扱ったデータを統計的にどのように判断していくのか、データの見方や取り扱いについて基礎的な統計を再学習する講義であった。18時からの授業でもあったため訪問看護師や看護学校教員などの方が仕事を終えてから参加することができていた。

「小児看護学」小児在宅療養と救急看護 2022/11/11 申込なし

「小児看護学」予防接種と感染症 2022/11/18 申込なし

「フィジカルアセスメント」看護師が行うフィジカルアセスメント 2022/12/8 申込なし

「養護教諭教育実習事前指導発表会（模擬授業）」および交流会&講演会
(2023/3/18 32名(学外2名))

公開講義として養護教諭課程の教育実習事前指導発表会（模擬授業）を行った。この講義では、学生が小学生や中学生への保健指導の模擬授業を行い、教員や参加者からの講評を受け、教育実習に向けてお互いの学びを深めた。

交流会では「小中学生における防煙授業の紹介」というテーマで本学の川端准教授に公演していただき、参加者の養護教諭からどのように防煙教育を実践しているか紹介していただき、大学と学校教育の連携について意見交換を行った。また、養護教諭や養護教諭就職が決まっている4回生からこれから就職活動をする3回生へ、どのように就職活動を行ったかを話していただくなど、学生との交流を行った。

新型コロナウイルス感染対策のため、ハイブリッド方式でZoomによるオンライン受講も可能としたことで、遠隔の方も参加できた。

4. 次年度にむけて

研修部門の運営を振り返った。1) の講演部門においては、いまだ続く COVID-19 感染拡大を鑑み、人数制限とソーシャルディスタンスを考慮し講演を展開した。久しぶりのライブ講演となり、講師と聴衆が一体となった講演の開催に至った。講師の協力、そして参加者の熱心な講演参加状況、時間延長するほどとなり、開催の前向きな評価につながった。

1. 情報部門
2. 本田可奈子教授、小野あゆみ講師、松井宏樹講師
3. 活動の概要

1) 広報活動とホームページ (HP) の更新

・例年通り、講演会、専門講座、共同研究募集についてチラシ・ポスターを紙媒体で発送し、関係機関への周知を行った。また、地域交流看護実践研究センターのホームページ上に、共同研究募集や講演会等に関する記事を掲載し、地域の看護職者への周知を行った。

2) 活動報告書の作成

・昨年度より活動報告書はホームページに掲載する方法をとることとなったが、とくに問題は生じておらず、今年度も継続している。これにより印刷にかかる経費の削減にもつながった。

3) リーフレットの改訂

・昨年度よりリーフレットを一新し、掲載写真を今年度のものに入れ替えて令和 5 年度版のリーフレットを作成した。令和 4 年度卒業式で卒業生に配布する。

4) インターネット回線の変更

センター開設以降より、センターのインターネット回線は、外部の個別サーバー (B フレツ) を契約していた。令和 2 年度に学内メールシステムが Office365 に移行され、保存容量の改善や最新のセキュリティ対策が実施され、外部メールアドレスを利用する必要性がなくなったことから、センターの回線を学内 LAN に接続することとなった (R5 2 月に完了)。それに伴い、センターのアドレスは「kangojissen@nurse.usp.ac.jp」に完全移行し (移行期間に 2 年をおいていた)、Zoom、文献検索用有料サイトはあらたなアカウントで契約変更した。

4. 次年度にむけて

情報部門は、コロナ禍を受けて 2020 年度より発足した。以後 HP、インターネット回線などの整備を行い、問題なく運用できている。情報部門として一定の役割は果たせたと評価できるため、今後は情報部門のあらたな役割を検討して次年度につなげていきたいと考える。